

かみく合

云

〔散木弄詔集九〕大殿にてかみく、あはせといふことせさせ給けるに、師のこひければよめる、君がよを神々いかにまもるらんまげきめゆひの數にまかせて略○中

人のもとにまかりたりけるにかみくをひきて、ものにとりいで、侍りければよめる、嬉しさのあまのみ空にみちぬればいとなくかみをあふぎみる哉

寶鏡

〔狂言記四〕あはだ口

大名罷出たるは、遠國の大名、太郎くわじや有かくわじやおまへに、大名ねんなふはやかつた、此中のたからくらべは、おびたゞしい事ではなかつたか、くわじや中々おびたゞしい事で御ざりました、大名いづれものたからにまけいでうれしいな、くわじやいやも、わたくしらていまでが、うれしう御ざります、大名それよ、さりながら明日は、あはた口をくらべさつまやれうと有、まてそれがしがたからの内に、あはた口といふものはないか、くわじやされば殿様の七萬寶のたからの中に、あはた口は御ざりませぬ、略○下

〔續狂言記三〕寶の笠

初アト 大果報の者誠に天下をさまり、あなたこなたの御參會お振舞は、おびたゞしいことござる、それについて、此度は、目の前にきどくの見ゆるたからを、くらべうと有、某が藏の内に、さやうの寶が有か存せぬ、尋ねませふ、やい、太郎くわじやあるか、略○下